



日本ワクチン学会 ニュースレター

vol.37

目 次

1. 日本ワクチン学会理事長挨拶	理事長 岡田 賢司	2
2. 第23回日本ワクチン学会学術集会を終えて	第23回学術集会会長 多屋 馨子	3
3. 第24回日本ワクチン学会学術集会のお知らせ	第24回学術集会会長 吉川 哲史	4
4. ワクチン関連トピックス		
I) 『アウトバウンド・インバウンド診療におけるワクチンの互換性』	川崎医科大学小児科学教室 田中 孝明	5
II) 『インフルエンザワクチンの有効性評価』	大阪市立大学大学院医学研究科公衆衛生学 福島 若葉	7
5. 会員会告		
1) 2019年度第1回日本ワクチン学会 Vaccine誌編集委員会議事録(2019年5月31日)	…8	
2) 2019年度第1回日本ワクチン学会高橋賞選考委員会議事録(2019年5月31日)	…9	
3) 2019年度第1回日本ワクチン学会理事会議事録(2019年5月31日)	…9	
4) 2019年度第2回日本ワクチン学会理事会議事録(2019年9月19日)	…12	
5) 2019年度第2回日本ワクチン学会 Vaccine誌編集委員会議事録(2019年11月29日)	…15	
6) 2019年度第3回日本ワクチン学会理事会議事録(2019年11月29日)	…16	
7) 第23回日本ワクチン学会総会議事録(2019年11月30日)	…19	
8) 2020年度第1回日本ワクチン学会理事会(新理事会)議事録(2019年12月1日)	…20	
6. 賛助会員一覧		22

§ 日本ワクチン学会理事長挨拶

日本ワクチン学会理事長
福岡看護大学 / 福岡歯科大学医科歯科総合病院予防接種センター
岡田 賢司

2019年12月に開催されました2020年度第1回日本ワクチン学会理事会において、新理事長に選任されました岡田賢司と申します。身に余る重責でございますが、新理事および会員の皆様のご支援をいただきながら、精一杯の努力をしてまいる所存でございます。どうぞよろしくお願い申しあげます。

予防接種に関わる多くの先達が組織された日本ワクチン学会は、2016年成人を迎えるました。2020年現在890名の会員を擁しております。記念すべき第1回学術集会は、1997年12月24日クリスマスイブ、外は冷たい小雨が降っていましたが、会場内はご参加の皆様のワクチンに対する熱い思いにあふれていたと記憶しています。

会長の大谷明先生は、本学会設立の趣旨を「ワクチン学振興を旗印とする」とされました。その発足にあたり、「日本は過去において世界のワクチン開発に少なからぬ貢献をしてきた。水痘ワクチン、日本脳炎ワクチン、無細胞百日咳ワクチンに関しては世界の先駆者の役割を果たしてきたし、国内のワクチンの優れた品質は世界から高く評価されている。最近のワクチン市場の衰退とは、あまりにも対照的である。日本ワクチン学会の設立にあたり 1) グローバル化に向けてのワクチン企業の抜本的見直し、 2) 厚生省における感染症対策部門とワクチン供給部門との緊密な連携による総合的ワクチン施策の実行、 3) 予防接種事業の健康保険への組入れや福祉予算適用による国民の予防接種費用負担の軽減、 4) 予防は治療に優るとする予防接種と経済効果の実地調査と啓発、の4点について特に強く訴えたい」と述べられておりました。

この20年間で、大谷先生が掲げられた課題は、歴代理事長の神谷 齊先生、清野 宏先生、山西弘一先生、倉根一郎先生、岡部信彦先生、大石和徳先生および学術集会の歴代会長、そして会員の皆様のたゆまぬ努力で前向きに進んできました。

次の20年は始まっています。これまで“産”と“学”で取り組んできた“より高い効果と安心して安全に使えるワクチンの開発”に加えて、“官”と“政”との連携を深めていくことが必要と考えています。さらに、「予防接種で防げる疾患はワクチンで予防する」VPDの考え方を広く皆様に知っていただくためには、子どもたちを含めた全ての国民への啓発が重要と考えています。

今後とも会員の皆様のご支援・ご協力をいただきながら、日本ワクチン学会として社会への貢献ができるよう、全力を尽くして参りたいと存じます。

§ 第 23 回日本ワクチン学会学術集会を終えて

第 23 回学術集会会長
国立感染症研究所 感染症疫学センター
多屋 馨子

令和元年 11 月 30 日（土）～12 月 1 日（日）の 2 日間、東京都千代田区にある都市センターホテルで、第 23 回日本ワクチン学会学術集会を開催させて頂きました。当日は全国から 750 名を超える皆様にご出席賜り、4 会場すべてにおいて、素晴らしい講演と活発な意見交換が行われ、盛会に終了できましたことを心から御礼申し上げます。

今回の学術集会のテーマは、「サーベイランスから対策へ～有効性と安全性の両輪で考えるワクチン元年」としました。会長講演でもこのテーマを講演タイトルとし、大阪大学在籍時の恩師で、現在、一般財団法人阪大微生物病研究会理事長の山西弘一先生に座長をしていただきました。大阪大学で学び研究した臨床ウイルス学を礎にして、国立感染症研究所に異動してからは、サーベイランスに軸足を移し、特に、予防接種で予防可能な疾患（Vaccine preventable disease: VPD）のサーベイランスと、予防接種の有効性と安全性について研究してきました。ともすればワクチンの安全性のみに大きな関心が寄せられて、ワクチンの接種状況が大きく変化するような事態も目の当たりにしてきましたが、ワクチンは常に有効性と安全性の両輪で考える必要があると考えます。新しい時代の始まりとワクチン学の発展を祈念してこのテーマに決めたことを思い出します。

特別講演には The University of Pennsylvania, Children's Hospital of Philadelphia の Paul A. Offit 先生をお招きして「How to Communicate Vaccine Science to the Public - Or Die Trying」と題した講演を行っていただきました。会場は満席で活発な意見交換が行われました。第 14 回高橋賞は北海道大学の喜田宏先生が、第 8 回高橋奨励賞は徳島大学の木本貴士先生が受賞され、それぞれ、「パンデミックインフルエンザワクチンの開発と実用化研究」、「ヒトの生体成分肺サーファクタントの生理作用を利用した安全で有効な新規粘膜アジュバント SF-10 の開発」と題した受賞講演が行われました。また、2015 年から実施されている韓国ワクチン学会との交流では、The Catholic University of Korea の Sun Hee Park 先生が「The changing epidemiology of herpes zoster over a decade in Korea」について講演されました。

もう一つ今回の学術集会から始まった制度として「若手奨励賞（40 歳未満）」があります。一般演題に応募された抄録内容を審査し、「臨床応用系・疫学系」から 2 人、「基礎研究系・製造開発系」から 2 人、計 4 人の「学術集会若手奨励賞」が選出され、当日の発表内容が優れた演者 1 名に「学術集会若手奨励最優秀賞」が授与されることになりました。4 人とも甲乙付けがたい素晴らしい講演でしたが、初代最優秀賞には大阪市立大学大学院医学研究科の松本一寛先生が選ばれました。今後もこの制度は継続されますので、多くの若手研究者が果敢にチャレンジしていただけることを期待しています。

また、学術集会の柱となるシンポジウム・モーニングセミナーとして、特別シンポジウム「風疹排除に向けて：座長 岡田賢司先生、森嘉生先生、演者 林修一郎先生、市田美保先生、小池雄一先生」、予防接種推進専門協議会共催シンポジウム「眞のワクチンギャップ解消に向けて（今後の展開が期待されるワクチン）：座長 岩田敏先生、中山哲夫先生、演者 西村直子先生、河本聰志先生、岡田賢司先生」、シンポジウム 1 「肝炎とがんとワクチン：座長 石井健先生、鈴木忠樹先生、演者 松浦善治先生、考藤達哉先生」、シンポジウム 2 「新しいワクチンサイエンス：座長 森康子先生、演者 國澤純先生、石井健先生」、シンポジウム 3 「国際化とワクチン：座長 中野貴司先生、勝田友博先生、演者

谷口清州先生、田中孝明先生、清水博之先生、高島義裕先生」、シンポジウム4「予防接種の教育啓発（専門医共通講習）：座長 崎山弘先生、杉下由行先生、演者 松岡康子先生、齋藤あや先生、砂川富正先生、神谷元先生」、モーニングセミナー「麻疹排除認定維持の課題：座長 竹田誠先生、砂川富正先生、演者 仁平穏先生、原康之先生、岡部信彦先生」が開催され、いずれの会場も満席で有意義な講演の数々と活発な discussion が繰り広げられました。また、今回の学術集会では10の教育セミナーが企業との共催で開催されました。同時開催のために拝聴できなかったセミナーがあったことを残念に思う特徴あるセミナーの数々でした。座長の労をおとり頂いた先生方、素晴らしい講演をしていただいた演者の先生方に感謝申し上げます。

魅力ある学術集会プログラムにしていただいたプログラム委員長の神谷元先生をはじめとするプログラム委員の先生方、学術集会にご出席いただいた多くの皆様のお陰で、実りある学術集会にできたことを心から感謝申し上げます。また、学術集会の準備・運営にご尽力いただいた運営事務局の日本コンベンションサービス株式会社の担当者皆様、学会事務局として準備の段階から終了に至るまでをささえていただいた国立感染症研究所感染症疫学センターの皆様にこの場を借りて心から御礼申し上げます。

現在、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）がパンデミック状態となって世界を席捲しています。学術集会の時には想像もしていなかった現状に驚きさえ感じます。しかし我々は、COVID-19の基礎研究、臨床研究、疫学研究を進め、ワクチン開発へと向かうことが期待されています。2020年12月に藤田医科大学吉川哲史先生会長のもと、COVID-19が何らかの着地点を迎えて名古屋の地で再びお目にかかる事を祈念し、「学術集会を終えて」の言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。

§ 第24回日本ワクチン学会学術集会のお知らせ

第24回学術集会会長
藤田医科大学 医学部 小児科学
吉川 哲史

2020年12月19日～20日の二日間にわたり、第24回日本ワクチン学会学術集会を名古屋で開催させていただきましたことになりました。会場の都合でクリスマス間近となっていましたが、思い起こせば1997年に大谷 明 先生が東京ヤクルトホールで開催された第1回の学術集会も12月で、非常に寒い中、日本で初めてのワクチン学の学会に参加し、熱い議論に触れた記憶があります。今回の学会も、それに負けないような熱い学会にしたいと思いますので、ぜひ多くの皆様方に最新の研究成果を持って名古屋にお越しいただければと思います。

さて、今回の学会のテーマを「ワクチンで創る持続可能な未来の医療」にさせていただきました。我が国を含む先進国では、いずれも少子高齢化が急速に進み、特に我が国はG7諸国の中でも飛びぬけて高齢者の割合が高いことが知られています。それに伴い急速に膨らむ医療費をどうやって削減するか、いずれの国においても喫緊の最重要課題として挙げられています。2000年の国家予算を基準としてみると、2016年の我が国の防衛関係予算はほぼ横ばい、教育・科学予算は82%に低下しているのに対し、医療費を含む社会保障にかかる予算は190%とほぼ倍増しています。そのような状況を鑑みて、国は2035年までの達成を目指して3つのビジョンとアクションプランを提示しています。一つ目のビジョンが保健医療の価値を高めること、二つ目が主体的選択を社会で支えること、三つ目は日本が世界の保健医療を牽引することとなっており、その中の二つ目のビジョンを達成するためのアクションプランとして、ワクチンの積極的推進による予防医療の充実で医療費削減を目指すと謳われています。

将来を担う子どもたちの未来を明るいものにするためには、来るべき本格的な少子高齢化社会を皆が健やかに継続的に暮らしてゆけるようにせねばなりません。そのためには“ワクチン”というツールを有効利用し、積極的な予防医療施策をとることで医療費抑制に努める必要があります。本学会では、そのような観点から人類の未来を支えるためのワクチン学の発展を目指して、皆で集まり議論を深めたいと思っています。

以上までは、本学会の開催に向けたご挨拶として COVID-19 流行前にしたためた内容です。ご存じのとおり、その後この emerging infectious disease は急速に拡大し、本学会も WEB での開催をせざるを得なくなりました。本来であれば名古屋で皆様とお目にかかり、熱い議論を交わす予定でしたが残念ながらかないません。当初のテーマに沿った話題に加え、SARS-CoV-2 ワクチン関連の講演、シンポジウムも計画いたしましたので、是非とも多くの会員の皆様方に WEB 参加していただければと思います。巷では、ワクチンに対する期待が極めて高くなっていますが、これまで長年にわたりワクチンに取り組んできた身からすれば、それほど簡単に有効かつ安全なワクチンが速やかに使用できるようになるとは思えません。専門家集団として、WEB ではありますが本学会を通して議論を深め、これまでの知見を整理し正しい知識の発信に努めてゆければと思っております。ご協力のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

会長：吉川 哲史（藤田医科大学 医学部 小児科学）
会期：2020 年 12 月 19 日（土）・20 日（日）【WEB 開催】
テーマ：「ワクチンで創る持続可能な未来の医療」
学術集会 HP：<http://www.cs-oto.com/jsvac24/>

§ ワクチン関連トピックス

トピックス I

アウトバウンド・インバウンド診療におけるワクチンの互換性

川崎医科大学小児科学教室 田中 孝明

1. はじめに

法務省統計（2016 年）によると、年間 1,700 万人前後の日本人が海外に渡航している（アウトバウンド）。また、約 2,000 万人以上の外国人がわが国を訪問し、約 240 万人の外国人が中長期期間（3 か月以上）わが国に滞在または居住している（インバウンド）。国境を越えて予防接種を継続する場合、ワクチンの互換性、各国の予防接種スケジュールの差異などが問題となる^{1) 2)}。本稿では、アウトバウンド・インバウンド診療におけるワクチンの互換性について解説する。

2. ワクチンの互換性（vaccine interchangeability）

「互換性がある」とは、接種スケジュールの途中で製剤を変更しても有効性（または免疫原性）や安全性が保たれることを意味する。同一の疾病に対する異なる製造会社のワクチンは、製造工程、使用された抗原の種類や量、その他の含有成分、接種回数、接種量、接種方法などの差異により異なる免疫反応を誘導する可能性がある。したがって、原則として同一のワクチンで完遂することが望ましいとされている^{2) 3) 4) 5)}。

3. 米国の状況

米国では、同一製造会社の同一成分のワクチンであれば、有効性と安全性の臨床試験に基づいて、単

価ワクチンと混合ワクチン（DPT、DPT-IPV、DPT-IPV-Hibなど）は互換性があると考えられている。また、A型肝炎、B型肝炎、Hib、ロタウイルス、4価結合型髄膜炎菌ワクチンは、異なる製造会社での互換性が確認されている。しかし、異なる製造会社のワクチンの互換性に関してあらゆる組み合わせを検討することは困難であるため、ACIP（Advisory Committee on Immunization Practices）は同一のワクチンの入手が困難な場合や、過去に接種したワクチン製剤が不明な場合には、入手可能なワクチンを使用するという現実的な方策が提案されている²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾。

4. わが国の状況

わが国では定期接種としての必要性から、マウス脳由来日本脳炎ワクチンと乾燥細胞培養日本脳炎ワクチン、ポリオワクチン（OPV、IPV、DPT-IPV）、異なる製造会社のB型肝炎ワクチンの互換性が検証された¹⁾²⁾。しかし、諸外国とわが国をまたいで接種を継続する場合は状況が異なる。臨床現場でしばしば遭遇する場面を、日本脳炎ワクチンを例に挙げて紹介する。

(1) アウトバウンド：わが国で日本製の乾燥細胞培養日本脳炎ワクチン（北京株）で接種を開始した者がアジア諸国に渡航した場合、追加接種を現地医療機関の判断に委ねるか、一時帰国等の際に同一ワクチンで追加接種を行うよう指示するか、判断に悩む場面がある。

(2) インバウンド：中国で日本脳炎の弱毒生ワクチン（乙型脳炎減毒活疫苗、SA14-14-2株）を接種した者がわが国に渡航し、日本製の乾燥細胞培養日本脳炎ワクチン（北京株）で接種を継続する場合、互換性が確認されていないため新たに初回接種から開始するか、不足分を追加接種するか、専門家でも意見が分かれる。前者は過剰免疫による副反応を、後者は不十分な免疫獲得を考慮する必要がある。対象者が限定されていることに加え、特に安全性の評価に関して多大なサンプルサイズの臨床研究が要求されるため、海外製と日本製ワクチンの厳密な互換性データを構築するのは非常に困難であることを理解する必要がある¹⁾²⁾⁶⁾。

5. 日本脳炎ワクチンの互換性

マウス脳由来ワクチン（中山株／北京株）がより安全な新世代のワクチンに切り替えられた（一部の国を除く）ため、諸外国では主に細胞培養不活化（Vero細胞由来）ワクチン（SA14-14-2株）、組換え生ワクチン（SA14-14-2株）、弱毒生ワクチン（SA14-14-2株）が使用されている。しかし、ウイルス株、接種スケジュール、接種方法（筋肉内注射／皮下注射）がわが国のワクチンと異なる。

主にマウス脳由来ワクチンと新世代のワクチンの互換性がその必要性から検証されている。過去にマウス脳由来ワクチン（中山株または北京株）を接種し、追加免疫として細胞培養不活化ワクチン（北京株、SA14-14-2株）、弱毒生ワクチン（SA14-14-2株）、組換え生ワクチン（SA14-14-2株）を接種した場合の免疫原性および安全性が確認され、また弱毒生ワクチンと組換え生ワクチンの互換性も評価されている（表）²⁾。

表. 日本脳炎ワクチンの互換性

			追 加 免 疫					
			マウス脳		細胞培養		弱毒生	
			北京	中山	北京	SA	SA	SA
初回免疫	マウス脳	北京	—	○	○	○	○	○
		中山	—	—	○	○	○	○
	細胞培養	北京	—	—	—	—	—	—
		SA	—	—	—	—	—	—
	弱毒生	SA	—	—	—	—	—	○
		組換え生	SA	—	○	—	—	—

マウス脳：マウス脳由来不活化 細胞培養：細胞培養不活化
北京：北京株 中山：中山株 SA：SA14-14-2株

○：互換性が評価されている

文献2)から作成

6. 互換性のまとめ

互換性が確認されていない異なる製造会社、異なる抗原のワクチンで接種を継続する場合は、被接種者の希望、感染リスク、予算、エビデンス、ワクチン学の理論、医療者の経験など、限られた情報で最良の選択をするのが現実的である。一部の病原体に限定されるが、対応策として接種後の抗体価測定や輸入ワクチンの使用も選択肢となる¹⁾⁽²⁾⁽⁶⁾

参考文献

- 1) 田中孝明 他：インバウンド小児に対する診療. 日児誌. 122, 627-37, 2018
- 2) 日本渡航医学会「海外渡航者のためのワクチンガイドライン／ガイダンス 2019」作成委員会：海外渡航者のためのワクチンガイドライン／ガイダンス 2019. 協和企画編, 2019
- 3) American Academy of Pediatrics. Active immunization. Red Book 2018-2021: Report of the Committee on Infectious Diseases. American Academy of Pediatrics, 2018
- 4) Ezeanolue E et al: General Best Practice Guidelines for Immunization. Best Practices Guidance of the Advisory Committee on Immunization Practices (ACIP)
www.cdc.gov/vaccines/hcp/acip-recs/generalrecs/downloads/general-recs.pdf (Accessed on March 31, 2020)
- 5) Kroger AT et al: General Immunization Practices. Vaccines 7th ed. Elsevier, 96-120, 2017
- 6) 田中孝明：中国からの帰国者の日本脳炎ワクチンについて. 医事新報, 4952, 55-56, 2019

トピックス II

インフルエンザワクチンの有効性評価

大阪市立大学大学院 医学研究科公衆衛生学 福島 若菜

インフルエンザワクチンの有効性研究は、「複数シーズンに渡り、統一的な疫学手法で継続的に有効性をモニタリングする」という考え方が主流になっている。欧米諸国で採用されている疫学手法は、症例・対照研究の一種である test-negative design である。インフルエンザ流行期に、事前に定義したインフルエンザ様疾患で医療機関を受診した者に検査診断を実施し、インフルエンザ陽性の者を「症例」、インフルエンザ陰性の者を「対照」と分類し、ワクチン接種状況を比較して有効率を求める。検査陰性 (test-negative) の者を対照とすることから、test-negative design と呼ばれる。Test-negative design には、「検査確定インフルエンザを結果指標としながら、受診行動に起因するバイアスを制御できる」という長所があり、インフルエンザワクチン有効性研究における長年の課題を解消できる手法である¹⁾⁽⁴⁾。

厚生労働省研究班（研究代表者・廣田良夫）では、test-negative design の手法により、小児におけるインフルエンザワクチンの有効性を継続的にモニタリングしている。地方衛生研究所との共同研究として real-time RT-PCR 法でインフルエンザの病原診断を行い、ワクチン接種歴は診療録や母子健康手帳で正確に把握している。さらに、ソース集団（研究対象者を生み出す集団）から研究対象者（病原診断の検査結果を有する者）を選定する過程で選択バイアス（selection bias）が生じることを回避するため³⁾⁽⁴⁾、「偏りのない登録と検査」を達成しうる手順をとっている。2013/14 シーズン以降、大阪府と福岡県の小児科診療所の先生方のご協力を得て調査を継続してきた。6 歳未満小児を対象とした連続 5 シーズンの調査の結果、いずれのシーズンもワクチン 2 回接種の有効率は 50% 前後、すなわち、「非接種者と比較して、接種者の発病リスクが約 1/2 に低下」という結果であり、すべて統計学的に有意であった⁵⁾。

現在、test-negative design によるインフルエンザワクチンの有効性評価は世界中で広く行われており、シーズン中の速報値（中間解析結果）を保健衛生当局と共有している国もある。世界保健機関（WHO）のワクチン株選定会議でも、GIVE (Global Influenza Vaccine Effectiveness) Collaboration (WHO が主導する研究者ネットワーク) により、直近シーズンのワクチン有効率（real-time RT-PCR 法による病原診断を採用している研究結果に限る）が世界各国から集約され、部外秘の会議資料として提示されている⁶⁾。日本からは、先に紹介した厚生労働省研究班の調査結果が唯一提出されている（2017 年 9 月の株選定会議資料から参加）。しかしながら、厚生労働省研究班の一分担研究であることから、対象年齢層

は小児のみと極めて限られた集団での評価にとどまっている。現状では国内速報値として活用する枠組みもできていないが、調査スキームはほぼ確立している。今後は、「国レベルの調査事業」のような位置付けで、全年齢層における継続的なワクチン有効性評価に拡大するとともに、わが国の株選定会議の参考情報としてタイムリーに提示できるシステムの検討が望まれる。

引用文献

1. Jackson ML, Nelson JC. Vaccine 2013;31(17):2165-8.
2. Foppa IM, et al. Vaccine 2013;31(30):3104-9.
3. Fukushima W, Hirota Y. Vaccine 2017;35(36):4796-4800.
4. Ozasa K, Fukushima W. J Epidemiol 2019;29(8):279-281.
5. 福島若葉,他 . IASR 2019;40:194-195.
6. World Health Organization.

https://www.who.int/influenza/vaccines/virus/recommendations/202002_recommendation.pdf

§ 2019年度第1回日本ワクチン学会 Vaccine誌編集委員会議事録

日時：2019年5月31日（金） 14:00 - 15:00

会場：AP品川 10F ルームF

出席：西條政幸（担当理事・委員長）、神谷 元、城野洋一郎、谷口清州、中野貴司、中山哲夫、西村直子、森 康子、大石和徳（オブザーバー）

欠席：石井 健、多屋馨子

事務局：田村

1. 前回議事録の確認

西條政幸委員長から前回議事録が提示され、異議なく承認された。

2.Vaccine誌への掲載原稿の進捗状況

依頼論文の進捗状況を確認した。No.150については編集委員長より、No.154については事務局よりリマインドを行なう。

3. 原著論文の受け入れについて

次回契約更新の際も、原著論文の掲載が可能な内容で更新することが確認された。

原著論文受入れ開始に向けて意見交換され、下記についてワーキンググループ（西條委員長、谷口委員、中野委員）で継続審議することとなった。

*投稿規定について

- ・投稿された論文が、Vaccine誌に投稿しリジェクトされた論文でないことを確認する。
(リジェクト時のコメントを提出してもらう等)
- ・論文の質を落とさないため、Revise回数制限を設ける。
- ・著者資格：First author および Corresponding author は必ず学会員とする。
- ・論文の長さ：Vaccine誌規定同様とする。
- ・ケースレポート：ワクチンに関する内容に限定する。

*その他

- ・海外では既に治験結果が出ているとして Elsevier にリジェクトされた論文でも、学会からの理由書を添えて当学会枠で日本人の成果を投稿できるように検討してほしい。
- ・学会で発表されたものを優先するか、締切を設けるか等については、運用開始後に検討していく。
- ・日本人同士の場合、査読コメントは日本語でも可としたい。

- ・学会HPや次回総会で、原著論文受入れ開始のアナウンスをする。

以上

2019年5月31日

日本ワクチン学会 Vaccine 誌編集委員会
委員長 西條 政幸

§ 2019年度第1回日本ワクチン学会高橋賞選考委員会議事録

日時：2019年5月31日（金）13:00 - 14:00

場所：AP品川 10F ルームF

出席：大石和徳（委員長）、明地正晃、奥野良信、砂川富正、竹田誠、永井英明、福島若葉

事務局：田村

- ・高橋賞、高橋奨励賞の選考

大石委員長より、高橋賞および高橋奨励賞の応募者確認が行なわれた。

高橋奨励賞については木本貴士先生（徳島大学 先端酵素学研究所）が最終候補者として承認された。高橋賞については会議時間内に結論が得られなかつたため、7月までにメールによる継続審議とすることを理事会に報告することとした。

- ・高橋賞規定等の改訂

会員が納得できる選考を目指すことを目的に、高橋賞規定および高橋賞選考委員会内規を改訂し、授賞者像をより明確にすることとした。メールによる継続審議を行い、改訂案を理事会で諮り、改訂を進める。

以上

2019年5月31日

日本ワクチン学会高橋賞選考委員会
委員長 大石 和徳

§ 2019年度第1回日本ワクチン学会理事会議事録

日時：2019年5月31日（金）15:00 - 17:00

場所：AP品川 10F ルームB

出席：大石和徳（理事長）、神谷 元、城野洋一郎、西條政幸、西村直子、明地正晃、奥野良信、砂川富正、谷口孝喜、竹田 誠、通山哲郎、長谷川秀樹、中野貴司、吉川哲史、永井英明、福島若葉、中山哲夫（監事）

欠席：石井 健、多屋馨子（監事）

事務局：田村

議事に先立ち、浅野善造先生の逝去が報告され黙祷を捧げた。

報告事項1. 前回議事録の確認（大石理事長）

2018年度第3回理事会議事録が提示され、異議なく承認された。

報告事項2. 一般経過報告（大石理事長）

2019年4月30日現在の会員数の現状、会員数の推移を含む会員異動報告があった。

報告事項3. 2018年度決算報告（長谷川理事）

2018年度一般会計および高橋記念基金の決算報告があった。異議なく承認された。

報告事項4. 高橋賞選考委員会報告（大石委員長）

同日開催された2019年度第1回高橋賞選考委員会にて、委員会時間内で候補者を挙げることができなかったため、継続審議としたことが報告された。高橋奨励賞については、木本貴士先生（徳島大学先端酵素学研究所）の受賞が決定した。

報告事項5. Vaccine誌編集委員会報告（西條委員長）

同日開催された2019年度第1回Vaccine誌編集委員会について、下記のとおり報告された。

- ・原著論文受入れ体制についてワーキンググループで継続審議を行なう。
- ・投稿された論文が、Vaccine誌に投稿しRejectされた論文でないことを確認する。
- ・First authorおよびCorresponding author両方が会員であることを投稿規定とする方針である。

報告事項6. ニュースレター報告（西村理事、明地理事）

西村理事より、Vol.36発行スケジュールが報告された。7月末～8月上旬の発行予定で現在原稿依頼を進めている。

報告事項7. 広報委員会報告（吉川理事）

例年どおりホームページ掲載・メール配信を行なっていることが報告された。

報告事項8. 予防接種推進専門協議会報告（神谷理事、長谷川理事）

神谷理事より主な議題について報告された。

- ・「風しんに関する特定感染症予防指針に基づき、早期に先天性風疹症候群の発生をなくし、2020年度までに風疹排除を達成するための緊急要望書」が協議会より厚生労働大臣に提出された。
- ・その他、定期接種化の予見性向上に関する意見交換、風しんおよび麻しんワクチン確保の働きかけ、出入国管理法改正および東京オリンピック・パラリンピックに向けた感染症予防等に関して情報交換された。

報告事項9. 全国公衆衛生関連学会連絡協議会報告（砂川理事）

平成30年度第2回総会について報告された。また、来春開催の全国公衆衛生関連学会連絡協議会総会にて、当学会が発表担当となっているため、発表内容や発表者について検討していくことが報告された。

報告事項10. 学術集会若手奨励賞ワーキンググループ報告（中野理事）

初めに大石理事長より、学術集会若手奨励賞の新設に伴い2019年1月にワーキンググループを発足したことが報告された。

2019年度 委員長：中野理事、委員：明地理事、長谷川理事、福島理事、神谷理事
オブザーバー：大石理事長

次に、中野委員長より下記のとおり報告された。

- ・ワーキンググループにて、内規および学術集会若手奨励賞・最優秀賞の採点表を作成した。
- ・内規および採点表は、学会事務局で管理し毎年の運営事務局と共有していく。
- ・次年度以降の委員構成については、各分野から1名ずつおよび、当該年度・次年度大会の運営事務局より1名ずつの選出とする。

報告事項11. 学術集会準備状況報告（各大会長）

●第23回日本ワクチン学会学術集会

多屋会長が欠席のため、運営事務局の神谷理事より報告された。

会長：多屋馨子（国立感染症研究所 感染症疫学センター）

会期：2019年11月30日（土）、12月1日（日）

会場：都市センターホテル（東京都千代田区）

テーマ：サーベイランスから対策へ 有効性と安全性の両輪で考えるワクチン元年

演題募集：2019年6月1日（土）～7月4日（木）

学術集会若手奨励賞の実施概要について確認された。

- ・開催1日目午前に、50分間のセッションを予定している。（講演7分・質疑3分）
- ・今回が初年度であるため、冒頭に賞設立経緯の説明時間を設ける。説明者的人選は運営事務局に一任する。
- ・採点時に同点となった場合は、同順位とせず、審査委員会内で順位を決定する。
- ・最優秀賞採点表に「発表内容が優れているか」の項目を追加する。

●第24回日本ワクチン学会学術集会

会長：吉川哲史（藤田医科大学 医学部 小児科学）

会期：2020年12月19日（土）、20日（日）

会場：愛知県産業労働センター ウインクあいち（名古屋市）予定

●第25回日本ワクチン学会学術集会

石井会長が欠席のため、大石理事長より報告された。

会長：石井 健（東京大学医科学研究所 感染・免疫部門 ワクチン科学分野）

会期：2021年

同年開催の国際学会候補地が日本となっているため、共催も検討している。

報告事項 12. 韓国ワクチン学会との交流について（大石理事長）

2019年度学術集会においても、韓国ワクチン学会の招聘講演を予定していることが報告された。また2019年9月開催予定の韓国ワクチン学会において、日本ワクチン学会からの招聘講演の演者を派遣する予定で協議を進めている。

審議事項 1. 学術集会補助金について（大石理事長）

抄録発送費は今年度以降も学会の実費負担とすることが確認された。補助金については変更を行なわないが、今後も課題としていくこととした。

審議事項 2. 名誉会員推戴条件について（大石理事長）

推戴条件の見直しが継続審議となっていたが、改訂は行わないこととなった。

審議事項 3. 高橋賞規定の改訂について（大石理事長）

高橋賞選考委員会より、改訂に向けて継続審議中であることが報告された。

審議事項 4. 理事選挙管理委員の選出について（大石理事長）

下記3名が今年度の理事選挙管理委員に選出された。

委員長：西條政幸理事、委員：永井英明理事、砂川富正理事

選挙スケジュールおよび実施要領が確認され、投票率を上げるため会員向けメールでリマインドを行なうこととした。また次回選挙では、会員の分野割合に応じて各分野の理事選出人数を改訂することとした。

審議事項 5. 会員名簿調査について (中野理事)

名簿調査票の改訂が行われた。

専門分野が臨床応用系である会員のみを回答対象として、診療科の選択項目を新設することとした。

審議事項 6. ニュースレターへの議事録掲載について (大石理事長)

議事録での個人情報取り扱いに注意するため、今後はニュースレター校正を理事全員で行なうこととした。

審議事項 7. 複写使用料について (大石理事長)

ニュースレターの複写使用について、利用料徴収の外部委託は行わないこととした。

以上

2019年5月31日

日本ワクチン学会

理事長 大石和徳

庶務担当理事 中野 貴司

§ 2019年度第2回日本ワクチン学会理事会議事録

日時：2019年9月19日（木）16:00 - 18:00

場所：AP品川 9階P+Qルーム

出席：大石和徳（理事長）、明地正晃、奥野良信、城野洋一郎、西條政幸、竹田 誠、谷口孝喜、通山哲郎、中野貴司、西村直子、長谷川秀樹、吉川哲史、石井 健、福島若葉、多屋馨子（監事）

欠席者：神谷 元、砂川富正、永井英明、中山哲夫（監事）

事務局：田村

報告事項 1. 前回議事録の確認 (大石理事長)

2019年度第1回理事会議事録が提示され、「報告事項4. 高橋賞選考委員会報告」の一部を修正した上で、最終版とすることが承認された。

報告事項 2. 一般経過報告 (大石理事長)

2019年8月31日現在の会員数の現状、会員数の推移を含む会員異動報告があった。

報告事項 3. Vaccine誌編集委員会報告 (西條委員長)

報告事項なし。

報告事項 4. ニュースレター報告 (西村理事、明地理事)

Vol.36が現在印刷発送手配中であることが報告された。

報告事項 5. 予防接種推進専門協議会報告 (神谷理事、長谷川理事)

報告事項なし。

報告事項 6. 全国公衆衛生関連学協会連絡協議会報告 (砂川理事)

砂川理事が欠席のため、大石理事長より報告された。

2020年3月27日（金）開催予定の全国公衆衛生関連学協会連絡協議会学術集会における市民公開シンポジウムについて、今後砂川理事を中心に発表内容や発表者を決定していくことが報告された。

報告事項 7. 広報委員会報告（吉川理事）

おおむね例年どおり、ホームページおよびメール配信を行なっていることが報告された。

報告事項 8. 理事選挙の結果について（西條委員長）

理事選挙結果が下記のとおり報告された。

基礎研究系：中山哲夫先生（北里生命科学研究所 ウィルス感染制御学Ⅱ）

森 康子先生（神戸大学大学院 医学研究科臨床ウイルス学分野）

臨床応用系：岡田賢司先生（福岡看護大学 基礎・専門基礎分野）

田中敏博先生（JA 静岡厚生連 静岡厚生病院 小児科）

製造・開発系：五味康行先生（阪大微生物病研究会 研究開発部門）

園田憲悟先生（KM バイオロジクス株式会社 研究開発本部製品開発部）

疫学系：多屋馨子先生（国立感染症研究所 感染症疫学センター）

報告事項 9. 会員名簿作成について（大石理事長）

例年どおり 10月発送予定であることが報告された。

報告事項 10. 韓国ワクチン学会との交流について（大石理事長）

今年度の招聘講演について下記のとおり報告された。

・第 23 回日本ワクチン学会学術集会

日時：2019 年 11 月 30 日（土）1 日目 13：00-13：30

座長：大石理事長

演者：Dr. Sun Hee Park (the Catholic University of Korea)

韓国ワクチン学会招待講演 “The changing epidemiology of herpes zoster over a decade in Korea”

・第 15 回韓国ワクチン学会秋季シンポジウム

会場：Catholic University of Korea

日時：2019 年 10 月 11 日（金）10：50-11：30

演者：砂川理事

基調講演 “Recent Epidemiology of Pertussis in Japan and Next Challenge”

次年度以降も交流を継続していく方向であることが確認された。

報告事項 11. 学術集会準備状況報告（各大会長）

各大会長より下記のとおり報告された。

●第 23 回日本ワクチン学会学術集会

会長：多屋馨子（国立感染症研究所 感染症疫学センター）

会期：2019 年 11 月 30 日（土）、12 月 1 日（日）

会場：都市センターホテル（東京都千代田区）

テーマ：サーベイランスから対策へ 有効性と安全性の両輪で考えるワクチン元年

今年度は事前参加登録を実施予定である。若手奨励賞を新設したことで若手会員新入会に繋げることができた。

●第 24 回日本ワクチン学会学術集会

会長：吉川 哲史（藤田医科大学 医学部 小児科学）

会期：2020 年 12 月 19 日（土）、20 日（日）

会場：愛知県産業労働センター ウインクあいち（名古屋市）予定

事務局長：河村吉紀（藤田医科大学医学部 小児科学）

●第25回日本ワクチン学会学術集会

会長：石井 健（東京大学医科学研究所 感染・免疫部門 ワクチン科学分野）

会期：2021年10-11月の週末

会場：東京都内会場選定中

国際学会との共催も検討していたがアジア開催が未定であるため、単独開催の方向で準備を進める。

審議事項1. 2019年度決算見込・2020年度予算案

2019年度一般会計決算見込み（2019年1月1日～2019年9月30日）について、おおむね予算どおりの決算見込みとなっていることが報告された。2020年度一般会計予算案および2020年度高橋記念基金予算案（2019年10月1日～2020年9月30日）については異議なく承認され、総会に諮ることとした。

審議事項2. 2022年度学術集会会長の推挙（大石理事長）

2022年度の主催として阪大微生物病研究会が推薦され、異議なく承認された。会長については未定であるが、総会までに決定する予定である。

審議事項3. 名誉会員推戴について（大石理事長）

2019年度は名誉会員に関する規約に定める要件に該当する会員がいないため、推戴なしとした。

審議事項4. 高橋賞・高橋奨励賞の選考について（大石理事長）

受賞者について下記のとおり報告された。

・第14回日本ワクチン学会高橋賞受賞者・受賞研究題名

受賞者：喜田 宏先生

北海道大学ユニバーシティプロフェッサー

人獣共通感染症リサーチセンター 特別招聘教授 統括

長崎大学感染症共同研究拠点 拠点長

受賞研究題名「パンデミックインフルエンザワクチンの開発と実用化研究」

・第8回日本ワクチン学会高橋奨励賞受賞者・受賞研究題名

受賞者：木本貴士先生

徳島大学 先端酵素学研究所 生体防御病態代謝分野 特任研究員

受賞研究題名「ヒトの生体成分肺サーファクタントの生理作用を利用した安全で有効な新規粘膜アジュバントSF-10の開発」

また、高橋賞規定および高橋賞選考委員会内規について、改定すべき箇所が挙げられた。改定内容については後日メール理事会にて確認を行なうこととした。

その他、情報提供

中野理事より、日本渡航医学会からの情報提供として、「海外渡航海外渡航者のためのワクチンガイドライン・ガイダンス」が改訂発刊されたこと、また、厚生労働省の実施する医療上の必要性の高い未承認薬・適応外薬の要望募集に対して、ダニ媒介脳炎ワクチン開発に関する要望書を提出したことが報告された。

以上

2019年9月19日

日本ワクチン学会

理事長 大石和徳

庶務担当理事 中野 貴司

§ 2019年度第2回日本ワクチン学会 Vaccine誌編集委員会議事録

日時：2019年11月29日（金）15:00 - 16:00

場所：都市センターホテル 6F 605

出席：西條政幸（担当理事・委員長）、神谷 元、城野洋一郎、多屋馨子、中野貴司、中山哲夫、西村直子、大石和徳（オブザーバー）

欠席：石井 健、谷口清州、森 康子

事務局：田村

1. 前回議事録の確認

前回議事録が確認され、異議なく承認された。

2. Vaccine誌原稿進捗状況

配布資料に基づき、2018年以降の原稿進捗状況が確認された。

3. 原著論文受け入れ、投稿規定について

- ・2020年内に、Elsevierとの契約を更新することが確認された。
- ・日本ワクチン学会の裁量で原著受け入れができるよう投稿規定を整備することを再確認した。
- ・他国で既に発表されている内容であっても、日本から発信することが重要だと考えられる内容、日本のワクチン行政・ワクチン研究に関する内容を優先して掲載するという内容を投稿規定に含めることとする。
- ・執筆依頼をした演者が原著を希望した場合は、持ち回り委員会審議とする。

4. その他

学術集会演題の執筆依頼について、以下のとおり決定した。

- ・次年度より、座長にとりまとめの執筆をする場合は、事後でなく事前に依頼をする。
今大会の依頼については、編集委員長から事前に声掛けをする。

- ・第23回学術集会演題の執筆依頼先は以下のとおりとする。

①特別講演

「How to Communicate Vaccine Science to the Public—Or Die Trying」

Dr.Paul A. Offit (The University of Pennsylvania, Children's Hospital of Philadelphia)

②韓国ワクチン学会招聘講演

「The changing epidemiology of herpes zoster over a decade in Korea」

Dr.Sun Hee Park (Division of Infectious Diseases, Department of Internal Medicine, College of Medicine, The Catholic University of Korea, Seoul, Republic of Korea)

③第14回高橋賞受賞記念講演

「パンデミックインフルエンザワクチンの開発と実用化研究」

喜田 宏先生（国立大学法人北海道大学ユニバーシティプロフェッサー）

④第8回高橋奨励賞受賞記念講演

「ヒトの生体成分肺サーファクタントの生理作用を利用した安全で有効な新規粘膜アジュバント SF-10 の開発」

木本貴士先生（徳島大学 先端酵素学研究所 生体防御病態代謝研究分野）

⑤モーニングセミナー [麻疹排除認定維持の課題]

竹田 誠 先生（国立感染症研究所 ウィルス第三部）

砂川富正 先生（国立感染症研究所 感染症疫学センター）

…座長によるまとめ。執筆方法は一任する。

⑥特別シンポジウム [風疹排除に向けて]

森 嘉生 先生（国立感染症研究所 ウィルス第三部）

…座長による全体まとめ、または森先生による総説。執筆方法は一任する。

⑦シンポジウム 1 [肝炎とがんとワクチン]

SY-1-1「C型肝炎対策の残された課題」

松浦善治 先生（大阪大学 微生物病研究所 分子ウィルス分野）

⑧シンポジウム 1 [肝炎とがんとワクチン]

SY-1-2「B型肝炎ウイルス感染症の制御を目指したHBワクチン免疫応答の解明」

考藤達哉 先生（国立国際医療研究センター 肝炎・免疫研究センター）

⑨シンポジウム 2 [新しいワクチンサイエンス]

SY-2-1「腸内環境から考える新しいワクチン学」

國澤 純 先生（医薬基盤・健康・栄養研究所 ワクチン・アジュバント研究センター）

⑩シンポジウム 2 [新しいワクチンサイエンス]

SY-2-2「機械学習と免疫学を駆使したワクチンサイエンス」

石井 健 先生（東京大学 医科学研究所 ワクチン科学分野）

以上

2019年11月29日

日本ワクチン学会

Vaccine 誌編集委員会

委員長 西條 政幸

§ 2019年度第3回日本ワクチン学会理事会議事録

日時：2019年11月29日(金) 16:00-18:00

場所：都市センターホテル 6F 606

出席：大石和徳（理事長）、明地正晃、奥野良信、神谷 元、城野洋一郎、西條政幸、谷口孝喜、砂川富正、中野貴司、西村直子、長谷川秀樹、吉川哲史、永井英明、多屋馨子（監事）、中山哲夫（監事）

欠席：竹田 誠、通山哲郎、石井 健、福島若葉

事務局：田村

報告事項 1. 前回議事録の確認（大石理事長）

2019年度第2回理事会議事録が提示され、最終版とすることが承認された。

報告事項 2. メール理事会議事録の確認（大石理事長）

2019年9月27日～10月11日および10月28日～11月13日に実施したメール理事会議事録が提示され、最終版とすることが承認された。

報告事項 3.一般経過報告（大石理事長）

2019年11月22日現在の会員数の現状、会員数の推移を含む会員異動報告があった。

報告事項 4.Vaccine誌編集委員会報告（西條委員長）

同日開催された委員会について報告された。

継続審議となっている原著論文受け入れに向けて投稿規定案を審議したほか、第23回学術集会の特別講演およびシンポジウムについての執筆依頼先を決定したことが報告された。

報告事項 5.ニュースレター報告（西村理事、明地理事）

西村理事より、2019年度はVol.36を発行済みであることが報告された。

報告事項 6.広報委員会報告（吉川理事）

特に問題ある内容はなく、おおむね例年どおり広報を行なったことが報告された。

報告事項 7.全国公衆衛生関連学会連絡協議会報告（砂川理事）

2020年3月27日（金）開催予定の全国公衆衛生関連学会連絡協議会学術集会における市民公開シンポジウムについて、当学会からの発表者は砂川理事、演題名は「インバウンド増加とワクチンによる感染症対策（仮）」としたことが報告された。

報告事項 8.韓国ワクチン学会との交流について（大石理事長）

はじめに砂川理事より、10月11日に韓国で行なわれた第15回韓国ワクチン学会秋季シンポジウムでの基調講演について報告された。

次に大石理事長より、今後の招聘対応の分担について下記のとおり提案され、承認された。

- ・手配や当日アテンド等は基本として大会運営事務局で行なう。
- ・費用は、大会運営事務局が招宴・懇親会・参加費を負担、学会が旅費・交通費・宿泊費等を負担することとした。

報告事項 9.学術集会準備状況報告（各大会長）

各大会長より下記のとおり報告された。

●第23回日本ワクチン学会学術集会

会長：多屋 馨子（国立感染症研究所 感染症疫学センター）

会期：2019年11月30日（土）、12月1日（日）

会場：都市センターホテル（東京都千代田区）

テーマ：サーバイランスから対策へ 有効性と安全性の両輪で考えるワクチン元年

●第24回日本ワクチン学会学術集会

会長：吉川 哲史（藤田医科大学 医学部 小児科学）

会期：2020年12月19日（土）、20日（日）

会場：愛知県産業労働センター ウインクあいち（名古屋市）予定

事務局長：河村吉紀（藤田医科大学医学部 小児科学）

●第25回日本ワクチン学会学術集会

石井理事が欠席のため、大石理事長より代理で報告された。

会長：石井 健（東京大学医科学研究所 感染・免疫部門 ワクチン科学分野）

会期：2021年

会場：会場選定中

報告事項 10.Web 選挙の検討について（大石理事長、事務局）

事務局より Web 選挙を含む会員マイページシステムについて説明された。

会員マイページおよび選挙システムを導入する方向で、引き続き導入内容を検討していくこととした。

審議事項 1.2019 年度決算報告（長谷川理事）

長谷川理事より 2019 年度決算（2019 年 1 月 1 日～2019 年 9 月 30 日）について報告され、続いて中山監事、多屋監事の会計監査報告書が提示された。異議なく承認され、総会に諮ることとした。

審議事項 2. 予防接種推進専門協議会報告（神谷理事、長谷川理事）

予防接種推進専門協議会より文部科学省へ提出予定の『「がん教育推進のための教材」へのワクチンによるがん予防の記載に向けた関連学術 20 団体の要望書』への学会名掲載について審議され、異議なく承認された。

審議事項 3.2022 年度学術集会会長の推挙（大石理事長）

一般財団法人 阪大微生物病研究会の五味康行先生が推薦され、異議なく承認された。

審議事項 4. 高橋賞規定・選考委員会内規改訂（大石理事長）

2019 年 9 月に行なわれたメール理事会にて挙げられた規定および内規の改訂案について審議し、下記のとおり改訂することとした。

・高橋賞規定 序文および規定 5

現行：財団法人阪大微生物病研究会

改訂：一般財団法人阪大微生物病研究会

・高橋賞規定 規定 1

現行：本賞は本学会の創立趣旨に沿ってワクチンに関する基礎研究、臨床応用、製造開発、疫学研究において卓越した貢献をされた方を授賞の対象とする。

改訂：本賞はワクチンに関する基礎研究、臨床応用、製造開発、疫学研究のいずれかの領域への継続的貢献と評価に値する十分な業績がある者を授賞の対象とする。

その他、情報提供

事務局より、学術集会中の総会および会議について確認された。

最後に、今期末で任期満了となる大石和徳理事長から謝辞が述べられた。

以上

2019 年 11 月 29 日

日本ワクチン学会

理事長 大石和徳

庶務担当理事 中野 貴司

§ 第 23 回日本ワクチン学会総会議事録

日時：2019 年 11 月 30 日（土） 13:30 - 14:00

会場：都市センターホテル 第 1 会場 3F コスモス

総会議長：第 23 回日本ワクチン学会学術集会会長 多屋馨子

1. 報告事項

1) 一般経過報告

大石和徳理事長より、2019 年度活動状況と会員数現状について報告された。

2) 理事選挙結果報告

西條政幸選挙管理委員長より、2019 年度に行なわれた理事選挙結果が以下のとおり報告された。

[就任期間：2019 年 12 月 1 日～2023 年度総会まで（4 年間）]

基礎研究系：中山哲夫先生（北里生命科学研究所 ウィルス感染制御学Ⅱ）

森 康子先生（神戸大学大学院 医学研究科臨床ウイルス学分野）

臨床応用系：岡田賢司先生（福岡看護大学 基礎・専門基礎分野）

田中敏博先生（JA 静岡厚生連 静岡厚生病院 小児科）

製造・開発系：五味康行先生（阪大微生物病研究会 研究開発部門）

園田憲悟先生（KM バイオロジクス株式会社 研究開発本部製品開発部）

疫学系：多屋馨子先生（国立感染症研究所 感染症疫学センター）

3) 日本ワクチン学会高橋賞・高橋奨励賞受賞者

大石和徳理事長より、第 14 回高橋賞受賞者は喜田 宏先生（北海道大学）に、第 8 回高橋奨励賞は木本貴士先生（徳島大学）に授与されることが報告され、この総会終了後に授賞式を執り行うことが報告された。

4) 日本ワクチン学会学術集会若手奨励賞受賞者

大石和徳理事長より、「学術集会若手奨励賞」および「学術集会若手奨励最優秀賞」が以下のとおり発表され、授賞式を執り行った。

学術集会若手奨励最優秀賞：松本一寛先生（大阪市立大学大学院）

学術集会若手奨励賞：小張真吾先生（医薬基盤・健康・栄養研究所）

佐々木永太先生（国立感染症研究所）

荒木 薫先生（佐賀大学）

2. 議 事

1) 2018 年度決算について

長谷川秀樹理事より 2018 年度決算報告があり、中山哲夫監事より 2018 年度会計監査報告が行われ、異議なく承認された。

2) 2019 年度決算について

長谷川秀樹理事より 2019 年度決算報告があり、中山哲夫監事より 2019 年度会計監査報告が行われ、異議なく承認された。

3) 2020 年度事業計画について

大石和徳理事長より 2020 年度事業計画について説明され、異議なく承認された。

4) 2020年度予算案について

長谷川秀樹理事より2020年度予算案について説明され、異議なく承認された。

5) 高橋賞規定の改訂について

大石和徳理事長より高橋賞規定改訂案について説明された。下記内容が異議なく承認された。

・高橋賞規定 序文および規定5

現行：財団法人阪大微生物病研究会

改訂：一般財団法人阪大微生物病研究会

・高橋賞規定 規定1

現行：本賞は本学会の創立趣旨に沿ってワクチンに関する基礎研究、臨床応用、製造開発、疫学研究において卓越した貢献をされた方を授賞の対象とする。

改訂：本賞はワクチンに関する基礎研究、臨床応用、製造開発、疫学研究のいずれかの領域への継続的貢献と評価に値する十分な業績がある者を授賞の対象とする。

6) 第26回学術集会会長の推挙

大石和徳理事長より、五味康行先生（一般財団法人阪大微生物病研究会）を理事会から推挙することが発表され、異議なく承認された。

7) その他

3. 次期会長挨拶

吉川哲史次期会長より次回開催概要が述べられた。

4. 第23回学術集会会長挨拶

多屋馨子会長より謝辞が述べられた。

※総会終了後に高橋賞および高橋奨励賞の授賞式が執り行われ、授賞記念講演が行われた。

以上

2019年11月30日

第23回日本ワクチン学会学術集会会長

多屋 馨子

§ 2020年度第1回日本ワクチン学会理事会(新理事会)議事録

日時：2019年12月1日(日) 7:15 - 7:45

会場：都市センターホテル 6F 605

出席：

任期 2018-2021 年度

明地正晃、奥野良信、砂川富正、竹田 誠、中野貴司、長谷川秀樹、吉川哲史

任期 2020-2023 年度

岡田賢司、五味康行、園田憲悟、田中敏博、多屋馨子、中山哲夫、森 康子

オブザーバー：大石和徳（前理事長）、石井 健（2021年会長）

事務局：田村

議題：

1. 新理事長の選出

会則に従い、投票により理事長の選出を行なった。

岡田賢司理事が新理事長に選出され、本人がこれを承諾した。

2. その他

各役職については、後日決定することとした。

以上

2019年12月1日

日本ワクチン学会

理事長 大石 和徳

日本ワクチン学会 賛助会員

＜二口賛助会員＞

KMバイオロジクス 株式会社
サノフィ 株式会社
第一三共 株式会社
一般財団法人 阪大微生物病研究会

＜一口賛助会員＞

M S D 株式会社
一般財団法人 化学及血清療法研究所
北里薬品産業 株式会社
グラクソ・スミスクライン 株式会社
三機工業 株式会社
医療法人 相生会
武田薬品工業 株式会社
田辺三菱製薬 株式会社
デンカ生研 株式会社
日東電工 株式会社
ニプロ 株式会社
日本ビーシージー製造 株式会社

五十音順 2020 年 9 月 1 日現在

日本ワクチン学会ニュースレター 第 37 号

2020（令和二）年 9 月 18 日発行

発行人 日本ワクチン学会
理事長 岡田 賢司

〒 169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号
新宿ラムダックスビル （株）春恒社 学会事業部内
日本ワクチン学会事務局

TEL : 03-5291-6231 / FAX : 03-5291-2176 / E-mail : jsvac@shunkosha.com
